

一人の女の子のゆめのお話

伊仙町立面縄小学校 三年 田中 悠葉

わたしは子がめのアーヤ。何日か前にたまごからかえって、今、すなの中で海に出ていくのをまっているところですよ。

じっとまっついていると、人間の女の子の一人言が聞こえてきました。その女の子は、近くのすなはまにすわっているようです。

「わたし、モデルになりたいなあ。だって、きれいな服をたくさん着ることができると、楽しそうだし、すてきなお仕事だな。」

へええ、人間の女の子って、そんなゆめを持つんだ。わたしは思いました。その時です。わたしたちのリーダーのシンが、

「みんな、そろそろすなの外に出るぞ。」

と、五十い上はいる、子がめのきょうだいたちによびかけました。わたしは、

「だめだよ。お日様がまだ、しずみきっていないよ。」

それに、人間の女の子が近くにいますよ。くらくらするまで、もう少ししまった方がいい。」

と、大声で言いました。シンは、  
「大丈夫だよ。人間って言ったって、まだ小さな子ど

ものようだし、いそいで行けばつかまらないよ。海もすぐそこだから、何とかたどりつけるよ。早く海に出たいんだ。」

と答えました。シンは、あわてんぼうなのです。わたしには、シンを止めることができません。

とうとう、シンが上に向かって動き出しました。それにつられて、みんなも動き出しました。わたしもしかたなく、上に向かってすなをかき分け始めました。みんな、おし合いへし合いして上っていきます。

ついに、頭がすなの上に出ました。あたりを見ると、だいぼうすくなくなっただけでしたが、まだ、明るさのこっついています。いそがなきやとわたしは思いました。手と足にさらにさらに力をこめて、すなをかき分けました。やっと、全たいが出ました。海はどっちだろ。ザブーンという、なみの音が聞こえました。わたしは方こうを決めて、思いつ切り走り出しました。

しばらく走ると、何かの鳴き声が聞こえました。カアカアと鳴いています。あれはからすです。どうしよう。食べられてしまう。わたしはあせりました。前よりも早く、手と足をかきました。でも、石やくぼみがじゃまをして、なかなか前へ進みません。シンもまわりのみんなも大あわてです。

黒いかげが、頭の上に近づいてくるのを感じました。

もうだめだと思ったしゅん間、あの人間の女の子のすがたが目に入りました。女の子は、近くでひろったほうをふり回したり、足でけるまねをしたり、小石をなげつけたりして、からすをおいはらおうとしています。からすは何回か近づいてこようとしましたが、女の子にじやまされて、なかなか近づいてこれません。

「よし、今のうちだ。みんな行くぞ。」

とシンの声。わたしたちは、大いそぎで海に向かいました。そして、やっと海にたどりつきました。体がすうつとすべるように、海の水の中へ入っていきます。

まわりのみんなも、次々に水の中へと入っていきます。

「どうやら、たすかったようだね。あの人間の女の子のおかげだ。」

とならんで泳ぎながら、シンが言いました。

「本当にそうだね。あの子のおかげだ。あの子はゆめをもっていた。おんがえしに、何とかそのゆめをかなえてあげられないかな。」

と、わたしは言いました。

「そうだな。海の神様におねがいしてみよう。」

というシンの言葉に、わたしはうなずきました。そして、わたしたちは遠い遠い海へと旅立っていきました。

それから、二十年の月日がたちました。わたしは、わたしが生まれた海にもどってきていました。そして、

お母さんがめとして、もうすぐたまごをうもうとしています。

月の明るい夜、わたしは人間などがいないことをたしかめて、すなはまに上がりました。たまごをうむじゅんびをしていると、二人の人間のおばあちゃんがやってきました。さん歩にきたようです。わたしが見つけられないようにじつとしていると、二人の話が聞こえてきました。

「あなたのまごのゆうはさん、東京でモデルとしてがんばっているんだってね。」

「うん、がんばっているよ。一生けんめいに勉強して、ど力して、自分のゆめをかなえたんだよ。」

あの女の子のゆめはかなったんだ。わたしは、とってもうれしくなりました。

二人のおばあちゃんは、向こうに行ってしまいました。わたしはとつてもやさしい気持ちの中で、一つ、二つと新しい命をすなの中につみおとしていきました。

